

アスキュー神父様が、ある雑誌に寄稿されてきたものを、各務原教会の信者さんが所蔵されていました。追悼の意味を込めて、ここに全文を紹介いたします。

### 「宣教司祭の証し」

アスキュー神父  
(聖心布教会司祭)

昨年(一九九二)の夏、オーストラリアに帰国するので飛行場に出かけようとしていたときに電話がありました。それは聖霊の満ちたが、司祭である私に、どんな恵みであったか、「証しを書いてほしい」という依頼でした。私は力リスマ刷新に携わってから約五年になります。私よりもずっと経験のある司祭が、「円熟した良い証しをする立場になるのに少なくとも五年くらいはかかるものだ・・・」と書いてあるのを読んだことがあったので、書いてみようかと思いましたが、書くかと思えば幾つかあったのですが、私は司祭として特別な賜物を何も頂いていないように思えました。

オーストラリアに着いて間もないある夜のこと、祈りの集いから帰る車の中で、私はそのジレンマ

を司祭である友人に話してみました。「体験したことをそのまま書いてみたらいいさ」と友人は勧めてくれました。「司祭だからといって、聖霊の満ちしを受けた時に他の人々と違った恵みを期待したり、違う満たされ方を期待したらだめだよ」と言ってくれ、彼自身がカリスマ刷新全国黙想会の指導を頼まれた時の体験を話してくれました。その黙想会で、友人は聖霊の満ちしを受けた人なら誰でも頂ける賜物について講話をしていたそうです。その黙想会に出席していた一人の司祭は、「君は何も新しいことを話していないじゃないか」と文句を言ったそうです。しかし友人は自分の講話がそこにいた人々の心に届いていたようだし、喜ばれていたことを強く感じていたもので、そのまま続けたそうです。その後間もなく、その場に神が介入なさり、数々のすばらしい癒しが起こり、美しい預言が語られたと言う話でした。

この話を聞いたら、私がカリスマ刷新から受けた恵みや自分の体験をそのまま単純に書けばいいのだと分かり、勇気が出ました。書

いているうちに、神が私の内に行っておられることは私が認識しているよりも遙かにずっとすばらしいことなのだ、神は私に示してくださいました。その恵みについてここに書くことにしました。

さて、私がオーストラリアに帰国したのは一通の手紙を受け取ったからでした。その手紙には、退役軍人の養護ホームに住んでいた兄が、自分の投資していたお金が誰かに引き出されると信じきってしまい、非常に混乱していること書いてありました。誰もその状況を兄が納得のいくように説明することができなかつたのでした。兄の心配を取り除き、静めることが出来るのは私しかないように思えました。オーストラリアに帰ってから、兄が投資していた基金の責任者や弁護士から書類を取り寄せたりするのに十日もかかりましたが、兄はその問題を私が管理することに満足していたようでした。

日本を出る時に管区長から、私の引退後は、日本で若い司祭を助けて欲しいが、一度オーストラリアに帰って、そこの必要を見てから結論を出すように言われました。

た。ですから、その時点で私は二つの問題に直面していました。第一は、引退後オーストラリアで働くべきか、それとも日本で働くべきかという問題。第二には、最終的には日本に戻るとしても、兄が生きている間は兄の側にいてあげべきではないか・・・という問題でした。このような状態の兄の側にいてあげたかったのです。

神が私に何を望んでおられるか、「はつきりとしたしるしをもって教えてください」と勇気を出して神に頼んでみました。神にしろしを求めたのは初めてのことでした。その夜、先の司祭の友人と再び祈りの集いに出席しました。私の隣に座っていたその友人は、神から預かった預言の言葉を語りました。それはこのように始まったのです。「私はあなたに聴く心を与える・・・」

翌日、私の兄はホームから姿を消してしまい、どこに行ったのか見当もつきませんでした。冷たく寒い冬の夜(日本の夏はオーストラリアの冬)、神が兄を御手の中で温め保護してくださるように神に頼みました。兄の寂しさを恐れ、